

ふるさと御所 文化財探訪

古墳時代（6）

鴨都波1号墳

埋葬位置と

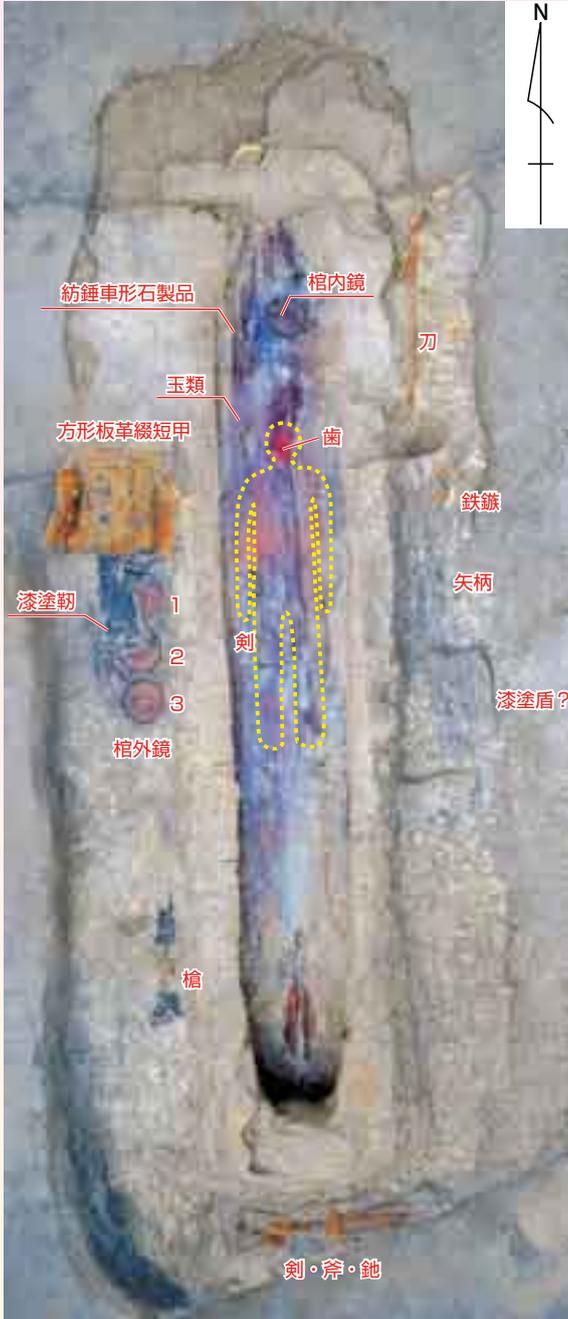
副葬品配置

(2)

生涯学習課文化財係
☎内線696

鴨都波1号墳の粘土槨はまったく盗掘されることなく、被葬者が埋葬されたままの状態で見出されました。槨は長さ4.3mのコウヤマキを刳り抜いた、棺身と棺蓋、および両小口を閉じるための2枚の板からなり、被葬者は棺のほぼ中央に頭を北に向けて埋葬されていました。

被葬者の年齢と性別については、遺存した歯によって壮年（30〜40歳前後）男子と鑑定されています。被葬者の頭部付近はとりわけ水銀朱の



鴨都波1号墳の粘土槨（合成写真）

赤が鮮やかですが、これは枕などに起因するものなのか、それとも葬送に際して直接顔面に塗られたものなのかは判然としません。

側頭部には翡翠製勾玉と碧玉製管玉で構成される首飾りがまとめて置かれ、北側には唯一の棺内鏡として三角縁神獸鏡が副葬されました。この銅鏡には吾有好同（私は良い銅を得た）で始まる二十一字の銘文があります。その西側に近接しては、円形で中央に穴を穿たれた、碧玉製紡錘車形石製品と呼ばれるものがあります。また、右腰付近には鉄剣があります。

足下から南側の棺内には木槨の痕跡しか残っていませんでしたが、本来は色とりどりの布や木製品などの有機質が副葬されたものと推測されます。

棺外にも豊富で顕著な副葬品があるのは、この古墳の重要な特徴の一つです。

棺外西では3面の銅鏡（三角縁神獸鏡）の上に矢と漆塗りの靴（矢を入れて背負うもの）が置かれ、さらにその北の端には鉄製の甲（方形板革綴短甲）がかぶさります。また、この位置が末端となる槍の柄は、南側に向かって2.6m伸び、先端部に装着された鉄製槍の本体へと至ります。

棺外東には北から順に鉄刀、矢、漆塗り盾と見られるものが置かれ、また、棺外南小口からは鉄剣と鉄斧や鉞などの農工具が木製の容器に収められて出土しました。

外の副葬品を比較すると、玉類は被葬者の身につけるものなので棺内のみみられる一方、矢は棺外のみ副葬となっており、総じて棺外の副葬品には矢のほか刀剣や槍といった武器、あるいは鉄製短甲といった武器が目立つことが分かります。

また、銅鏡は棺内に1面、棺外に3面がみられますが、鍍上がりにはかなりの差があります。棺内鏡は現在もお白銅色に輝く、まさに「吾有好同」にふさわしい良質の青銅（銅と錫の合金）によるものですが、棺外鏡3面については赤銅色で錫の含有率が低く、両者には明らかに差があることが分かります。

この点については次号でやや詳しく述べますが、このように、棺内と棺外に副葬品目や内容を違えて分け置く行為は、現在の我々にも通じる感覚といえるでしょう。



2010.